

YとLとSのこと

北川 正信

ひところわが家の洗面台に濃い空色と白の幅広い格子に細い濃紺の線を沿えた模様のタオルが掛かっていた。その一端に近くYの字とLの字を斜めに並べ、それらにSの字を絡ませたロゴマークらしきものが入っていた。世事に疎い私は、それがイブ・サンローランを意味することも知らずに、「あゝ、円とポンドとドルか、どうしてこんな文字をデザインにしたのだろう…」などと、ぼんやり思っていたのだった。2008年6月1日死去したその人は、フランス植民地だった頃のアルジェリア生まれ、若くしてパリに出、フランスを代表する世界的なファッションデザイナーとなったということであった。

以上が今回ペンを執るきっかけとなった前置きであって、YとLとS、つまり代表的な世界通貨にまつわる経験と受け売りをご披露してみようというのである。円(¥)は言うまでもなくわが国の通貨であり、昔は圓と記され、風格のある大型紙幣でお目見えしていた。その風格と懐かしい文字に、元(ゲン)ではなくて圓紙幣として中国で出会った時はいささか驚いた。「何だ、日本の貨幣単位は支那からの借り物だったのか…」という落胆めいた感懐を覚えたものである。円形が360°だというので、戦後長い間1ドル360円に固定されていたことを、ふざけた決め方だと屈辱に感じていた国民も少なくなかったのではあるまいか。その見くびられていた円が、いまや世界で最も信頼ある通貨として買われているのだから世の中は面白いものである。

大英帝国以来のポンドはどうであろうか。ポンドなのにどうしてLなのだろうとは誰しも抱きそうな疑問である。しかし、これは金本位制が根底にあることに思いが至れば氷解する。すなわち、金1ポンド(重さの単位)に相当する価値が1ポンド(貨幣の単位)なのであり、格式を重んずる大英帝国らしく、重さの単位のラテン語LibraのLをお借りして蝶ネクタイを着けさせた(£)ということのようだ。英国のポンドは他国のそれと

区別するためにポンド・スターリング(同通貨の一括名として単にスターリング)ともいわれるが、それが内容的に真価を発揮していたのは一昔前の1ポンド=20シリング、1シリング=12ペンスの時代である。私がロンドンに留学していた1968~1969年はちょうど十進法(1ポンド=100ペンス)への移行期であり、10シリング銀貨(ダイムと呼ばれていた)に該当ペンス値の刻印もあったと記憶している。6ペンスという小型の銀貨にも当時は価値があり、このシックスペンス1個で散髪ができた。もっとも、シャンプーなし、髭剃りなしで、スペイン出身の床屋に首筋を毛だらけにされて帰り、直ぐにシャワーを浴びなければならなかったが…。厚手の3ペンス銅貨(トレペンス)、2ペンス銅貨(タペンス)が、それぞれ朝刊1部、マッチ箱1個(当時はまだ家庭での必需品)であり、赤銅色の1ペンス(ペニイ)貨は有料トイレの料金であった。ちなみに、「ちょっとトイレに…」は“… go to pay a penny”であった。

さて、アメリカ貨幣単位のドルであるが、その名称は古いドイツの大型貨幣ターレルに由来するそうである。問題はその表示記号(symbol)である。上にSと記して話を進めてきたが、どうやらそれは怪しいようだ。この記号\$は七つの海を制していたスペインの商船が通貨として用いていたペソ(これも元はといえば重さの単位)から来ているとのことである。事実ウエブスターの大学生用辞書には、ドルを使用している国々のほかに、ペソを使っている諸国の通貨にも同じ記号が記されている。そして、アンカー英語大辞典にはペソのPとSを重ねて出来たという説や合衆国のUとSが重ねられたという俗説が紹介されている。ところが、私がスペイン旅行中に古い商船の展示場で受けた説明では、「Sに縦棒を引いたシンボルはSの字とは全く関係が無い。あれは正に商船の甲板に立っている2本の杭棒にロープを巻きつけた姿から来ている」というのであった。船といえば商船であった時代の着想だというから、どうやらこちらの方に信憑性がありそうである。

(富山医科薬科大学名誉教授)

水飲み鳥と父のプレゼント

深谷 眞志

ラジオの朗読番組が好きで、NHKのラジオ文芸館や、日曜夜の西田敏行さんと竹下景子さんの新日曜名作座をよく聞いている。

先日、この番組で阿刀田高氏の短編作品「独りぼっち」が放送された。飲み屋を経営する主人公の女将が帰途ショーウィンドウに飾られた水飲み鳥を買い求めるシーンがあり、聞いていて私が少年時代を過ごした街の模型店を思い出した。

生まれ育った昭和30年代当時の東京神田は街に活気が満ち溢れ、生家のあった小川町周辺は戦前からの面影を色濃く残していた。

間口二間の小さな生家は四六時中、都電や自動車が行きかう繁華な交差点の角に位置し、目の前には交番、向かい側の角には都電の線路を切り替える操車塔が立っていた。

戦災を潜る抜けた重厚なYMCAの建物をはじめ、頻繁に通ったI模型店が入る小川町ビルディングも都電通りを隔てた反対側にあった。模型店はこの他にも神保町のすずらん通りにY堂模型店、錦町にはK教材社、須田町には鉄道模型専門店のK模型もあって、模型に興味がある少年たちには願ってもない贅沢な環境にあった。

折から戦記ブームだったこともあり、少年雑誌のマンガはもちろん、模型の世界もミリタリー一色だった。勉強が苦手な、もっぱら軍艦や模型に関心のあった私は、小学校から帰ると、駄菓子屋やI模型店に足繁く出入りした。

通りに面した店の入り口には、小さなショーウィンドウがあり、この店で一番高価な鉄道模型の隣に水飲み鳥が飾られていた。気化熱によって生じる温度差から反復運動を繰り返す原理を利用し、コップに入れられて水を、あたかもお辞儀をするように飲む仕種が珍しく、飽くことなく眺め続けた。

店内には大小様々な軍艦模型を中心に、ゴム動力で飛ばす飛行機や戦車の工作キットまで並んでいた。ほとんどが木製で、小さなものでも子供には組み立てるのが困難なものばかりだった。

完成させることも出来ないのに、私は大小様々

な軍艦模型を、小遣いを貯めては買い集めた。

未完成の模型に囲まれ、得意になっているこの頃の古い写真が手元にある。

私が小学生1～2年の頃、恐らく写真が撮影された前後のことだった。クリスマスと正月のお年玉を兼ね、父はI模型店の一番目立つところに置かれた最上級の大きな軍艦模型を買ってくれた。精巧な大型模型の制作など小さな子供には不可能で、すべて父が作った。

無口で、無愛想の父だったが、毎晩、図面とにらめっこしては船体を削ったり、部品を組み立てていた顔には温和な表情が漂っていた。

この時期、定職を持たず日々悶々としていた父にとって、模型制作はひとつの生きがいになっていたに違いなかった。

生活は生家の店舗部分の僅かな家賃と母が勤めていた保険会社の収入、それに母と祖母が夜なべした裁縫の手間賃でなんとか糊口しのぐ状況だった。

そんな母の苦労をよそに、父は小説家を気どり、社会運動にも一時のめり込んだものの、この頃何をしてたのか記憶は漠としている。

私が中学へ進級する頃になっても父は定職を持たず、僅かな家賃収入と仕立ての手間賃のみでは生活が立ち至らなくなり、3年への進級を控えた春、先代から半世紀以上住み続けた神田の街を離れることになった。

結局、家を手放すことしか解決方法を見出すことはできず、街を離れた後、川崎から麴町、多摩へと住まいを転々とした。

生まれ育った街を離れてからの日々は、たえず周囲に慌ただしい空気が流れているようで、およそ模型をつくるような心境とはかけ離れたものだった。

父も神田を離れてからは、家を売却した資金を手元に事業を軌道に乗せるのに精一杯だった。私自身も思春期を迎え、精神的に内に籠るようになっていて、模型を顧みる余裕は失われていた。

父が丹精込めて作った模型はその後どうなったのか、記憶になく、恐らく引越しの慌ただしさの中で処分したのかもしれない。

私は、新しい土地での生活にまったく馴染むことが出来ず、友人も作ることも出来ないジレンマから、次第に不登校や引きこもりを繰り返すようになっていた。その頃の私には自分の弱さをど

うすることも出来ず、精神的にも萎縮しきって、まったく解決の糸口は見出せなかった。自宅のあった中央沿線の多摩の丘陵をあてもなく歩く日が続いた。

自分の人生を真剣に考えるようになったのは、高校3年への進級を控えた春のことだった。

父はその後、職を転々とし、印刷会社にしばらく勤めた後、化粧品会社の社員食堂の経営や、冷凍食品の販売を手掛け、スーパーにも出店したこともあったが、結局長続きせず、資金繰りに行き詰まって倒産し、一時的に一家は離散した。

知人の紹介で父が自動車関係の団体に職を得たのはそれからしばらくしてからのことだった。

神田を離れてから44年、その父も鬼籍に入ってから10年の歳月が流れた。

番組に登場した水飲み鳥からI模型店を思い出して、最近インターネットのオークションで当時の木製の軍艦模型を手に入れた。いささか少女じみではあるが、キットを手にしたとき、どこかに置き去りにしていた懐かしいものに合えたような気持ちだった。

父が作ってくれた模型とは比較にならないほど小さなキットだったが、色褪せたパッケージを眺めていると、I模型店の情景や、街の殷賑も鮮や

かに蘇ってくる。また、定職に就くこともできず女房の実家で、悶々としながら、ひたすら模型を作り続けていた父の孤独を今更ながら感じたような気もした。

生まれ育った街には、その後、祭りや町会の催しに協力してきた経緯から、町会に籍を置くように懇請され、2年前から町会費を納め、イベントが行われる度に街に通うようになっている。

15年以上通い続けた馴染みの居酒屋で小学校時代の友人と杯を交わした後、彼が経営する老舗のジャズ喫茶に足を向けたりする。生まれ育った街で寛いでいると、懐かしい生家に戻ったような満ち足りた気分になれるからだ。

余談だが、I模型店の入っていた小川町ビルは取り壊され、立て替えられていて今はなく、YMCAも移転し、跡地には現代風の高層建築が建ち、昔日の面影はまったく感じられない。

神田を離れて以来、水飲み鳥はどこかで見たような記憶もあるのだが、どこで見たのか霞がかかったように漠としていて思い出すことはできない。

プロフィール
社)日本自動車整備振興会
歴史作家



ひまわり2輪

清水 隆子

私の母と夫の母は、揃って8月生まれ。母は同い年の父と横浜で2人暮らし、義母は我が家の近くに1人で暮らしている。どちらも高齢ながら、まめな養生で健康を保ち、ありがたく思っている。

84歳の母は、祖母が42歳の時に生んだ末っ子だった。人生50年と言われた時代、父親は母が生後3カ月の時に他界した。残された祖母は、「教えたことがたくさんあるが、時間がない」と考えたのだろう。まさに物差し片手で人としての生き方をスパルタ式に母に教え込んだようだ。

そんな娘時代と戦争を体験し、その後の人生でも多くのことを経験してきた母。この頃は、「自分が生きているうちに知っていることは何でも教えたいから遠慮なく聞いて」

と、出会う人に熱心に叡智を伝えている。

娘の私にも電話をよくかけてくる。

「何々について思い出したので話しておきたい」「誰々さんが〇〇の病気になった時、こういう方法で快復した」「今、テレビで良い番組を放送している。とてもためになるので見て」等々、積極的だ。

こちらの用事でかけた時も母の話が加わるので、たいてい長電話になってしまう。

その電話で対照的なのが義母だ。行動が早く何でもテキパキ終わらせるので、電話の会話も短い。電報のようで、あっという間に切れてしまう。こちらもいかに要領よく会話するか神経を使う。

90歳の義母は、実家の経済的事情で、ここ市川に若くして働きにやってきた。まじめに一生懸命働き、周りに可愛がられ、やがて義父と結婚。事業を興した夫と家族、親族、会社を懸命に支えてきた。

義父が亡くなった後も皆の心の支えとして、とても頼りにされている。『生き方の勉強会』を45年も続け、地域に奉仕し、いつも周りの世話をし

ている。毎日多くの人に接し体を良く動かし、とても90歳とは思えないバイタリティーだ。

東日本大震災が起こった時、心配して私が駆けつけたところ、古い木造の家の窓は逃げ道確保のため全部開けられていた。すぐに無事な姿を現した義母の一言は、

「こっちは大丈夫、心配ない。自分の家を守るように。気をつけて帰りなさい」

動揺していた私と対照的に義母のほうが落ち着いていた。

義母の家の前は、会社の従業員のためのマイクロバスの発着所になっている。ふだんは夕方6時過ぎに会社から戻ってくるバスが、着いたのは翌朝だった。義母はほとんど寝ずに待ち続けた。

いつも人と情報が集まる義母の家、非常時も変わらず皆の中心の役目を果たしていた。本当に立派だ。

その同じ日、母のほうは購入した食品が配達されたところだった。43年前に十勝沖地震を経験したことのある母は、それ以来、食料の備蓄と防災用品の準備を欠かさない。彼女の備えも万全だった。

電話がなんとか通じるようになると、父と一緒に気がかりな親戚や知り合いにどんどん電話をして、皆に無事を伝えてくれた。体調を崩した親戚にはすぐに手紙と見舞いを送り、元気づけてもいた。

いろいろなことが起きても強く前向きに生きる母たちには、いつも励まされる。

つい先日、母を訪ねると、ひまわりの花を見た母が楽しそうに歌い出した。

「ひまわりのようにになりたい。ひまわりのように生きたい。太陽に向かっていつも胸を張って歩きたい。ひまわりは太陽の花。希望に向かっていつも腕を振って歩きたい。太陽に向かっていつも大地をけて歩きたい」

明るいメロディーだ。コーラスを指導していた高木東六先生作曲の歌だそうだ。

まるで母と義母のような花の歌だと思った。真夏生まれのひまわり2輪、元気に長く咲き続けてほしいと願っている。